

学びの源泉 三谷 宏治

第 16 号 MBA に学ぶ (後編)

#Rome! By all means, Rome.

約 1 年半、私はフランス フォンテーヌブローで暮らし INSEAD に通った。

もの凄い「詰め込み」なので学期と学期の間は、土日含めて 3 日しか休みがなかったりする。それでも 1 月スタート 12 月修了の冬コース¹だったので、途中 1 ヶ月半の夏休みもあり、数多くの旅行を楽しめた。

まずは 3 月初旬に行った、Roma (仏語綴り) の 2 日間。これは誠に素晴らしいものだった。

最初はちょっとした驚きから始まった。

Torino オリンピックの開会式で気がつかれただろうか。日本は Nippon でも Japan でも Japon ない、Gippone だったのだ。これはビックリした。

ローマのホテルで日本への国際電話の仕方を調べようと思って、電話帳を開いても「J」のところには Japan に近い綴りがないのだから。

イタリア電話公社は日本をなめているのか！とちょっと本気で思ったが、気を取り直してリストを眺めていたら、ああ、これかと。

その後、ホテルの自室から日本に国際電話を掛けて毎分 2,000 円チャージされたのもビックリしたが、抗議してももちろんムダだった。

さて、Roma で最初に訪れたのはバチカン市国、システィーナ礼拝堂。

ミケランジェロの壁画「最後の審判」は修復中で見られなかった。でも一杯の「笑顔」と出会えた。

¹ 他に 9 月スタート 7 月修了の夏コースがある

ヨーロッパでは北から南にかけて子供大好き社会になる。イギリスでは、子は高校を卒業したら 100%家を出て、そのまま戻らない。親もその巣立ちの時をまだかまだかと待ちかまえている。

一方、スペイン、イタリアでは子供大好き、家族大好き、お母さん大好き、だ。Roma も全く例外ではなく、行く先々で私たちの長女(生後 5 ヶ月)は、圧倒的な人気を博していた。

若い男性以外は老若男女、みんながニコニコしながら寄ってくる。それどころかイタリア人の集団に囲まれて軟禁状態になったことも 2 度。ミラノから来た女子高生 30 人が「今度は私がこの子と一緒に写真を撮る！」と長女を奪い合って、30 分間。イタリアの農協の団体さんに取り囲まれて 15 分間。

日本人の新生児が当地では珍しいせいもあるだろうが、特有の「真ん丸さ」が、受けたようだ。細い目に低い鼻、まっすぐの髪・・・私たちに当たり前のものが「赤ちゃんらしい」「カワイイ」と映る。

ともかく、人々の笑顔に囲まれて、とても快適な 2 日間だった。バチカン、パラティーノの丘、フォア・ロマーノ、トレビの泉、そしてスペイン広場。

ヨーロッパではどこが一番良かったかって？

それはもちろんローマ、なんと言ってもローマ。(『ローマの休日』より)

#Hasta la vista, baby

アスタ ラ ヴィスタ。

これはスペイン語で、また会う日まで元気でね、

じゃあまたな、という意味。それを英語として使うとちょっとワルぶった感じの別れの挨拶になる。

『ターミネーター2 (T2)』で最も有名なこのセリフは、故に日本語字幕では「地獄で会おうぜベイビー」と訳された。名訳である。

当時、ちょうど T2 が封切られていたのだが、私はフランス語に吹き替えられた T2 (てるみなたー・どっ) も、フランス語字幕の T2 (そんな素早く仏語を読めない) も勘弁だったので、日本に帰国後見た。

さて問題は、この映画のスペイン語版だ。

スペイン人にとって Hasta la vista は日常語。ちっともワルぶってない。ではスペインの T2 配給元はどうしたか？

なんとこのスペイン語を、SAYONARA, baby. と「訳した」のだ。

大抵のスペイン人は「サヨナラ」という言葉を知っている。昔々 (1957!)、マーロン・ブランド主演の同名の映画が流行ったから (らしい)。

これからは、T2 で知った、ということになるのだろう。

夏のスペインでの旅も楽しいものだった。お勧めは国有のホテルチェーンである「PARADOR パラドル」だ。

殆どが歴史的建造物そのもの、もしくはそれに準ずるような建物によって構成されている。

スペインの友人曰く「独裁者フランコの唯一のよい遺産」だ。設備もロケーションも良いし英語も通じる。

問題は予約が取りづらいことだが、何より絶景、抜群の眺望を持つ。特にアルコスデラフロンテーラの PARADOR はお勧めだ。

奥行き 3m ほどの広いバルランダの下は、100m 以

上の断崖絶壁。鳥が空に舞うのを上から見下ろし、なだらかに続く丘と畑が、視界いっぱいになりなく広がる。鳥のさえずる声も、トラックの音も、遠くからかすかに聞こえてくる。

そこでは確かに時間がゆっくりと流れていた。

#The Prince of Wales

イギリスの皇太子は、一般に Prince of Wales (ウエールズ国の皇太子) と呼ばれ (故ダイアナ妃は Princess of Wales)、皇太子即位式は、必ず Wales のカーナヴォン城 (Caernarfon Castle) で行われる。

これはいったい何故なのだろうか。何故素直に Prince of Britain や Prince of UK でなく、一地方の皇太子と名乗るのか。

ロンドンから北西に数百キロ、ウエールズは今も国という名称を持ち、首都を持つ。長年の戦いの末、イングランドに併合された後も、その独自の文化を保ち続けてきた。

ウエールズに車で近づくと、交通標識に見知らぬ言葉が添えられているのに気づく。アルファベットではあるが、まったく読めないものだ。例えば「End」が「Diwedd」だったりする。

それがケルト人古来の言葉の一つ、ウエールズ語だ。

ウエールズに近づくとつれ、ウエールズ語表記のサイズは大きくなり、主従が逆転し、英語の表記サイズがどんどん小さくなる。近年、独自文化の復権のために、一部の学校教育では「ウエールズ語で教える」ことすら認められているという。

さて、Prince of Wales の話だ。

これはウエールズを征服したイングランドの王、

エドワード1世によるウエールズ融和策の一部だったのだ。滅ぼされ、血が絶えたウエールズ王家であったが、征服者であるエドワード1世は王妃エリナーの懐妊を知り、カーナヴォン城で生まれたその子を、ウエールズ皇太子＝英国皇太子とした。ウエールズをそれほど重要な地と内外に示したわけだ。

イギリスはこの手の話が多い。数百年にわたる戦いにより、国を創り上げてきたその歴史がここそこに垣間見える。

スコットランドの人々は自分たちのことを決して British (英国人) は呼ばない。自分たちは Scotts (スコットランド人) だと言う。INSEAD のスコットランド人も、電車の中で出会った年配のスコットランド人も、胸を張ってそう言っていた。

ウエールズの人だって自らの国籍欄に Welsh (ウエールズ人) と書いてしまう。本当は United Kingdom (UK)²、なのだけれど・・・

イギリスはその正式名称どおり「連合王国」なのだ。日本のような(ほぼ)単一民族でもないし、単純な単一国家でもない。もっともっと複雑で、血で血を洗う歴史を背負った国なのだ。

#The War

INSEAD の友人たちは、みなそれぞれの事情と国情、使命を背負っている。

私の友人としてサウジアラビア人もいれば、イスラエル人、ヨルダン人、イラン人、もいた。数年前にミサイルを撃ち込んだ側と撃ち込まれた側だ。

実際、イスラエル人の友人は、湾岸戦争のとき数百メートル先にミサイルが落ち、大音響とともに家の窓ガラスの殆どが割れ落ちたという。たまたま地

下室にいた奥さん(妊娠8ヶ月)から「大きな音がしたけど、どうしたの?」と聞かれて彼は、心配させまいと「いや、なんでもないよ」と精一杯の平静さで答えた、とか。

私とイスラエル人は友達、私とヨルダン人は友達、でも隣国でありながら彼らは決して視線を合わせようとはせず、ぴりぴりした平穏を保っていた。

旧ユーゴスラビア出身の友人は、自国で夫婦共々医師でありながら自国に見切りをつけ、必死の思いで出国し INSEAD の生徒となった。彼はある授業で東欧諸国に関する紹介を任され、みなの前でプレゼンテーションをした。

東欧の地政学的ユニークさ、人々の暮らし、そしてボスニア紛争、経済状況・・・20分の演説の間、自国の惨状に触れるにつれ彼は激高し、ついに最後、こう言い放った。

「君たちには決して分からない。」

「人は、パンのために人を殺せるんだ！」

私たち生徒の一人として言葉もなく、ただ、深い悲しみとともに頭を垂れた。

紛争中、凶弾に倒れたボスニア市民は2万人とも言われている。オリンピックのメインスタジアムは破壊され、そのグラウンドは当時、数千の白い墓で埋め尽くされていた。

日本に住んでいては、感じる事のない現実の「戦争」が INSEAD では身近に存在した。

日本に生まれ育ったことを幸せに思いながらも、日本では風化するだけの戦争の恐ろしさを体感できた(させられた)ことも、INSEAD での最大の学びではなかつたらうか。

最後に蒙古斑についての注意をひとつ。文字通り蒙古斑(おしり・背中の中のアザ)はアジア系赤ん坊

² 正式には The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国

特有のものだ。欧米の病院では気をつけよう。

医者でも殆どその存在を知らないので、「虐待の証拠」とされて子どもは即隔離、親は逮捕、なんて笑い話（笑えない）もある。

私の友人がフランスで出産したときは、その子の蒙古斑を見に、病院中の医者・学生が集まったとか。

さて、これくらいで、INSEAD を中心としたヨーロッパ紀行を終えよう。大変なこともあったが、楽しいこと、が殆どだった。いろいろな場所で普段会えない多くの人に会い、風景を見、美術を堪能した。

それらは、私の人生を深めるという意味では最高の1年半だったと、思う。

皆さんも、如何？

初出：CAREERINQ. 2006/04/28